魔法の Wallet　プロジェクト　活動報告書

報告者氏名:亀田隼人　　**所属:**東京都立南花畑特別支援学校　　**記録日:**令和２年２月１６日
キーワード:コミュニケーション、表現、視覚化

対象児の情報

•学年　知的障害特別支援学校小学部６年
•障害名　知的障がい　広汎性発達障害
•障害と困難の内容
・愛の手帳３度（東京都の療育手帳で中度に相当する。）
・言語面：２語文は確実に表出する。
　　：日常生活に使用する単語は概ね理解している。
　　：平仮名による簡単な文章（「○が□で△をする」等）を理解する。
　　：イラストを見て適切な語を平仮名で書くことができる。
　　：特に音声では、５Ｗ１Ｈの理解が曖昧。
　　：自分の情緒、特に困ったことの表明ができない。
・性格は人懐こく、安心していられる場面では、スキンシップを求めたり好きな人に自分の食べ物を分けたりするなどの様子がある。
・聴覚に過敏があり、苦手な音がある場面から逃避したり、パニックを起こしたりする様子がある。
・魔法のダイアリープロジェクトに参加し、文字や画像で活動を視覚化して予告したことで、授業や行事に抵抗なく参加できるようになった。
・文字で、自分の活動予定を報告したり、活動に対する意気込みや感想を表明したり、助けてほしいという援助を求めたりできるようになった。
・学級の友達に関心を示し、自ら関わろうとするようになってきた。

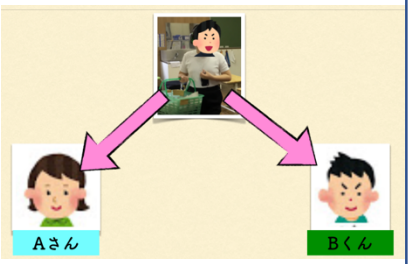
活動目的

1. ねらい
◆ 同年代の友達との関係を深める
◆－１　相手の思いに気づく
◆－２　自分の思いを、相手にわかるように伝える
2. 実施期間　平成 31 年４月～令和２年２月
3. 実施者　亀田隼人
4. 実施者と対象児の関係　学級担任

活動内容と対象児の変化

1. 対象児の事前の状況
昨年度末、学校生活における場所や活動に抵抗がなくなると、周囲の人への関心を行動で示すようになった。

1)昨年度の学級編成と友達との関わり
昨年度の対象児の学級は、３人で編成されていた。友人 A、B は、単語の理解はあるが会話は難しく、やり取りは一方通行になりがちだった。対象児は、相手が好きな物を考え、それらを渡す方法で友人と関わろうとするよう

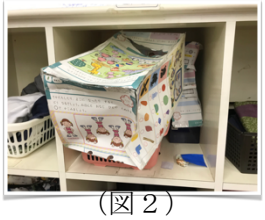


（図１）

になった。年度末には、学級の全ての友達と関わるようになった（図１）。

《エピソードⅠ「かかわりの芽生え」》（図２）

折り紙好きな対象児が紙工作をしていると友人Ａが作品に手を伸ばす。後日作品を友人Ａのロッカーに入れた。さらに後日友人Ｂにも作品を手渡したが、折り紙に興味のない友人Ｂはその場に作品を置く。友人Ｂは対象児の iPod に関心があることに気づき、自分の iPod を手渡した。友人Ｂは音楽を楽しんだ。



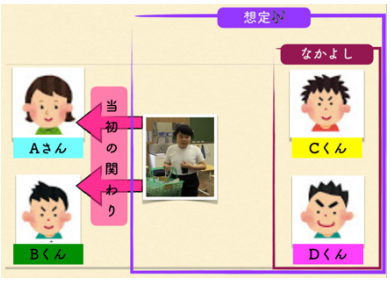
（図２）

このことから、対象児には人と関わりたい思いがあると感じた。また、その関わりは、自分の思いを伝えるだけのものでなく、相手の状況や嗜好をイメージしたより深いものだと感じた。音声だけでのやり取りが難しい対象児が人と関係するためには、文字や画像を活用することが有効ではないかと考えた。

２)今年度の学級編成

今年度の対象児の学級は、５人で編成された。新しく加わった友人Ｃ、Ｄは昨年度同じ学級で元々仲が良かった。また、音声での会話ができ駄洒落などの言葉遊びや物真似などが好きな児童だった。

対象児には、徐々に同年代の友達と関わるようになってほしいことと、やり取りを双方向のものにしたいことから、主な関わりの相手には友人Ｃ、Ｄがいいのではないかと考えた（図３）。



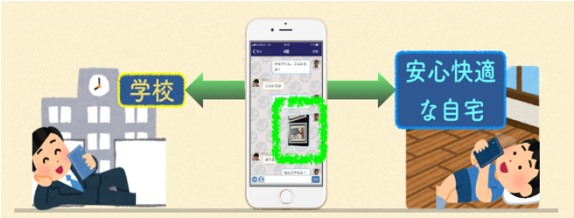
（図３）

2. 活動の具体的内容

ねらい達成のために、以下の取り組みが必要だと考えた。

１)「By Talk for School」による「おはなしメモ」（図４）

「By Talk for School」をダウンロードした iPhone を「おはなしメモ」と称し、毎日本人とやり取りした。対象児は日常的に家庭の iPad で YouTube 視聴やネットサーフィンを楽しんでいたため、保護者の見守りの下で使うようにした。



（図４）

昨年度、活動への見通しがあることで参加状況が大きく変化する対象児には、文字や画像による予定告知が有効だった。予定は、学校現場だけでなく、対象児が最も安心していられる自宅で知ることができることと、前日に知ることで参加までに心構えを整えることができることをねらい、昨年度から継続して行う取り組みだった。

今年度は予定告知に加えて、友達との関わりを思い出す事で共感したり違いに気づいたりすること、また、改めてその時の思いを表明したりする場になることをねらい、画像を活用して生活自体を話題の中心にした。

友達との関係がある程度深まった段階で、友達をグループに招待し、会話を楽しむようにした。

２)「UD Talk」による「きょうのおもいで」（図５）

日常の様子を iPad に撮りため、帰りの会で投影して紹介した。画像を見ながらの会話を「UD Talk」で文字化しモニターに映し出した。

友達が、学校現場で対象児に直接関わるようになったが、対象児は音声での発信にうまく応えらない様子があったことから、その場での相手の思いがしっかりと届くことをねらって行った。

マイクが現場の様々な音を拾い上手く会話だけを文字化することが難しかったため、発言の順番や会話のパターン、モニターのポインティングなどの工夫が必要だった。

（図５）

3. 対象児の事後の変化

1)友達との双方向の関わりが増えた

「おはなしメモ」における学級担任とのやり取りでは、開始当初から学校生活への感想や活動報告、困りの表明ができた。また、友達のことをよく観察しており、学級担任が友達の食べ物に対する嗜好を言うと、その間違いを指摘する様子もあった。

《エピソードⅡ「友人 C との双方向のやり取り」》（図６）

対象児の iPod の調子が悪い時に嘆いていると、友人 C が「大丈夫だよ」と言葉をかけた。その場では反応しなかった対象児だが、後日の給食では自分のおしぼりを青虫に見立て、友人 C の頭の上を歩かせた。友人 C も同じように青虫を作り、2 人で遊んだ。

（図６）

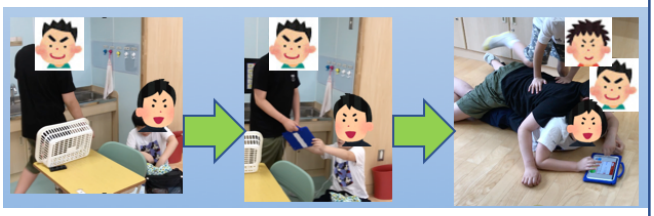
《エピソードⅢ「友人 C に対する思いを表明」》（図７）

「きょうのおもいで」で校外学習が話題になると、友人 C が「対象児かわいい」と発言。その場の表情は薄かったが、当日夕方の「おはなしメモ」では、友人 C と一緒に行けたことを喜んだ。

（図７）

《エピソードⅣ「友人 C、D と一緒に遊ぶ」》（図８）

教室の椅子から落ちた対象児に、友人 D が「大丈夫？」と言葉をかけた。対象児は笑って、その時持っていた iPad を友人 D に貸した。友人 D は受け取ってアプリで遊んだ。それ以降、友人 C も交えて一緒にアプリを楽しむ姿が増えた。



（図８）

《エピソードⅤ「友人を誘う」》（図９）

移動教室では、朝起きると一番に iPad を友人 D の側に持っていき遊びに誘った。移動場面でなかなか動こうとしない友人 D に「歯を磨こう。」の言葉で行動を促す姿もあった。

（図９）

《エピソードⅥ「友人 A との距離が縮まる」》（図 10）

友人 A は以前から対象児の iPod に関心があった。以前は、対象児が友人 A の様子を伺い iPod を貸すか、友人 A が無言で iPod に手を伸ばす関わりが多く、対象児にとっては自

（図 10）

分が使いたいときに使えないもどかしさから、友人 A から離れることがあった。そこで、「おはなしメモ」や PowerPoint で「貸して」「どうぞ」の言葉の使い方を伝えた。友人 A が「貸して」と言い、K くんの了解を得てから iPod を借りるようになると、2 人が側にいる姿が増えた。「貸して」の言葉は学級全員が頻繁に使うようになった。

「きょうのおもいで」では、活動の振り返りだけでなく、それぞれの関心事を話題にするようにした。その結果、お互いが好きな遊びに関心を示すようになった。自分一人で遊びを楽しむ経験を積み上げ、学級全員で一つの遊びを共有するようになった。

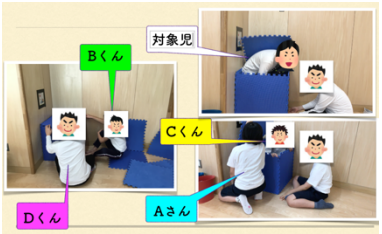
《エピソードⅦ「友人 B と遊ぶ」》（図 11）

教室にある人形で遊ぶ友人 B を見ていた対象児は、友人 B に寄っていき人形に手を伸ばした。後日、対象児は人形を友人 B のところに持っていき、2 人でお世話をして遊んだ。給食児には人形を抱きかかえ食事を食べさせるふりをして遊んだ。友人 B とは、それ以降追いかけっこを楽しむ姿がみられた。

（図 11）

《エピソードⅧ「学級全員で遊びを共有する」》（図 12）

教室にあるマットを組み立てて「マンション」に見立て、順番に出入りして遊んだ。



（図 12）

学級における友達同士の関係が深まってきたため、友人 C を「おはなしメモ」のグループに招待した。友人 C の行為に「優しい」と感想を言ったり、友人 C に、個人的に自分の楽しい思い出を報告したりするようになった（図 13）。

（図 13）

2）友達に支えられ、友達を支えるようになった

《エピソードⅨ「友人 C の励ましでアトラクションを堪能する」》（図 14）

暗い場所が苦手な対象児は、修学旅行で行くディズニーランドに抵抗があり「おはなしメモ」で相談した。友人 C は、「怖いのはやめましょう」と学級担任に進言した。学級担任の同意を受け、当日は暗いアトラクションも楽しんだ。

（図 14）

《エピソードⅩ「いざこざを仲裁する」》（図 15）

対象児は普段から友達の様子をよく観察し、「おはなしメモ」で報告していた。教室内外で友達同士が不穏になると、「ダメダメ」と言って仲裁に入った。

（図 15）

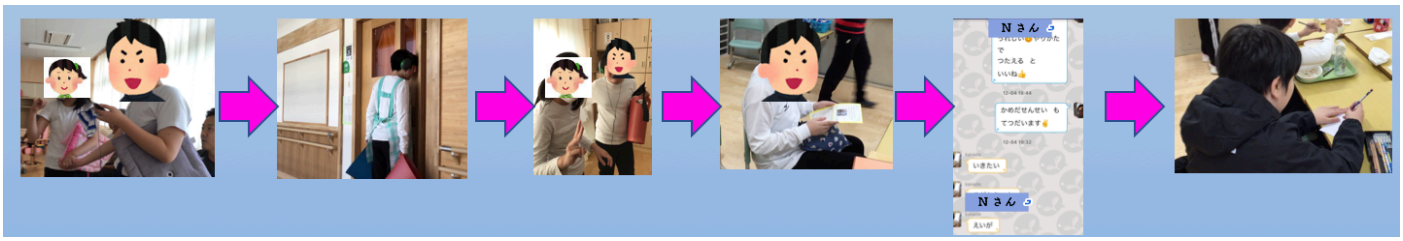
3）相手に伝わる方法を自分なりに工夫するようになった

友達への関心の幅は他学級にまで広がった。異性への興味も芽生えため、「おはなしメモ」や「きょうのおもいで」で好ましい関わり方を伝えた。触りたくなる衝動を抑え、話しかけたり手紙を書いたりする姿が増えた。

《エピソードⅪ「別の学級の友人を誘う」》（図 16、17）

授業で他学級の友人 N に活動に誘われたことがきっかけで、係活動の途中で他学級を覗くようになった。“一緒に給食を食べよう”という招待状をもらうと大喜び。その後交流給食を重ねる。自由時間には友人 N のところへ行き、「●組に（遊びに）行こう」などと誘うようになった。断られると映画など別の提案をした。「おはなしメモ」で手紙の方法を提案すると、早速書いた。

（図 16）



（図 17）

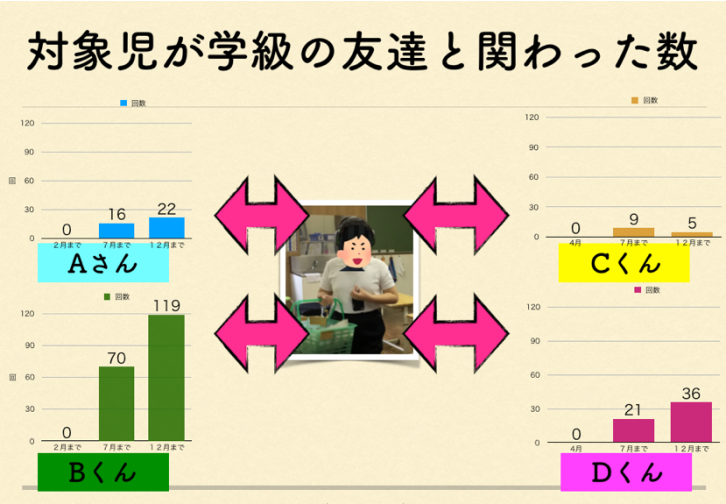
報告者の気づきとエビデンス

・主観的気づき

人間関係を深めるためには、関係する人が共有できる情報の受信手段や、思いの発信手段を保証することが必要なのではないか。対象児にとっては、文字や画像がそれらに相当したのではないか。

・エビデンス（具体的数値など）

学級の全員と双方向の関わりができるようになったこと（図 18）。校内を一人で巡り、様々な人と関わろうとするようになったこと。人間関係を保てるようにやり取りを仲裁する姿がみられるようになったこと。相手と上手く関わるために伝え方を工夫するようになったこと。



（図 18）

対象児は、年度末には学級担任に行き先を伝え、一人で校内を行き来し、様々な人と関わるようになるなど関わりの幅を大きく広げた。また、関わりの内容は、当初からあった物の受け渡しのような単純なものだけではなく、相手の状況や思いに応じて行為を変えるような複雑なものがみられるようになってきており、質にも変化があったと考える。今後は、友達とのやり取りを通してより社会的な関係を広げ、深めてほしいと願う。